

自然共生園とは

東北地方のきびしい自然と人とのかかわり合いによって育まれた文化や里の自然を体験し、楽しみながら学ぶことができる施設です。再生された里の田園風景、居久根、草原、湿地、牧野など、みちのくらしい動植物が豊かな里の自然を、散歩しながら楽しめます。

■見どころ紹介

～里地の自然～

耕作地・水田・居久根

畑では、ソバや麦、青菜や蕪、豆類など東北地方の食文化にちなんだ作物を栽培しています。春は青麦が風にそよぎ、夏はソバの白い花が一面を覆い、秋は柿や栗が実ります。懐かしさとぬくもりのある、みちのくらしい里地の風景が楽しめます。

「居久根」とは屋敷林のことで、季節風を防ぎ、落葉や焚付けを採るための暮らしに欠かせない林でした。居久根に植えられた、田打ち桜とよばれるコブシが咲くころになると、その年の農作業が始まります。

～草原の自然～

展望野草園・サクラソウ園・放牧区

草が飼料や肥料として必需品であった時代には、里地に草原が維持されていました。草が利用されなくなると草原もなくなり、今では草原特有の動植物が絶滅に瀕しています。ここでは、かつて人の手で維持されていた草原（半自然草原）の再生を目指し、オキナグサ、サクラソウ、カワラナデシコ、キキョウなど、50種類ほどの野草を、この地域のタネから育てて増やしています。

放牧区ではヤギやヒツジを放牧し、ふれあい体験ができます。初夏に刈る羊毛は手仕事体験に利用しています。かつて草刈の時に使用した草泊りを復元してあります。

～水辺の自然～

湿生花園・ヨシ原・スゲ原・ヤナギ湿地林・小川

湿生花園では再生した湿地で、野草をタネから育てています。初夏から秋にかけて、カキツバタ、チダケサシ、クサレダマ、ヌマトラノオ、ミソハギ、コバギボウシ、サワギキョウ、オオニガナ等が咲きます。ヘイケホタルも生息するようになりました。

ヨシ原やスゲ原、ヤナギ湿地林は、かつての水田の跡地です。初夏のヨシ原ではオオヨシキリが子育てを行います。園内を流れる小川ではアブラハヤやスナヤツメ等の魚類、カワトンボ等の水生動物が生息しています。

～樹林の自然～

コナラ林・産線樹林・ヤナギ林

コナラ林や産線樹林では、下刈を行って明るい雑木林を再生し、樹林特有の野草を育成しています。春にはルリソウ、クリンソウ、初夏にはニッコウキスゲ、夏にはソバナ、秋にはキバナアキギリ等、四季折々の野草が咲きます。野草の豊かな雑木林の散歩が楽しめます。



.....：秋の花の道草おすすめコース(2,000m)

.....：山羊ふれあい体験場所へのコース(230m)



～展望野草園からの蔵王の眺め～

快晴の日には、展望野草園の頂きから屏風岳、熊野岳など蔵王の山々の眺めが楽しめます。また、東側には、北川を挟んでコナラの雑木林で覆われた里山地区や、こんもりとした釜房山が望めます。里山地区へは、ドックランの傍の橋を渡って、歩いて行くことができます。※現在、里山地区は閉園中です。



～体験施設～

自然共生情報館

自然共生園の受付です。園内の見所や草花を、展示や映像などで紹介しています。草を素材としたクラフト等の体験ができるほか、イベント情報、野の花情報、生き物情報なども発信しています。随時、自然再生や農園活動、手仕事活動のボランティアさんを募集しています。

知恵体験舎

板の間や縁側で、のんびりと休憩できます。体験イベントでは、農作業体験や、ここで採れた作物を使った食品加工体験など、みちのくの自然との共生が育んだ暮らしの知恵が学べます。

●お問い合わせ先：みちのく公園管理センター
TEL 0224-84-5991 (担当田代、葉坂)
〒989-1505

宮城県柴田郡川崎町大字小野字二本松53-9
<http://www.michinoku-park.info/wp/>





てくてくマップ 自然共生園

11月



今日はここを観てみよう！

■晩秋の生きもの

アマガエル（位置Fほか）

雑木林の中を歩いていると、枯草の色になった冬眠間近のアマガエルが、足元から飛び出してくることがあります。



フユシャクガの仲間（位置Fほか）

フユシャクガは、寒くなると現れる小型の蛾で、林内をヒラヒラ舞う姿がみられます。雌には翅がありません。写真のクロスジフユエダシャクは、代表的な種類です。



雪虫の仲間（位置Aほか）

風のない穏やかな日に、妖精のような雪虫がふわふわと飛ぶことがあります。大きさ3~4mmのアブラムシの仲間です。



今日はここを観てみよう！

■秋の小鳥

モズ（林縁など）

秋になると高鳴きをするので、よく目立つようになります。「もずのはやにえ」と呼ばれる、バッタやカエル等の獲物を串さしにする習性があります。



ヒヨドリ（樹林など）

この時期、集団で訪れ、ピーヨ、ピーヨ、と甲高く鳴きます。一年中見られますが、夏にいた集団は南へ渡り、この時期の集団は、北から移動してきたものだそうです。



ヤマガラ（樹林など）

おなかのオレンジ色と顔の黒とクリーム色が特徴です。この時期はあまり人を恐れないので、エゴノキ等の硬い実をよく食べている姿を観察できます。



今日はここを観てみよう！

■いろいろな実

ハシバミ（位置A・E）

カバノキ科の低木で、クッキーやチョコレートに使われるヘーゼルナッツの仲間です。やや湿った場所に生え、共生園では小川沿いや湿地に見られます。



ガマ（位置G）

ソーセージのような実が、この時期になると、突然ポワポワっと膨らみ、綿毛のようなタネが一斉に風に飛ばされます。ひとつの穂のタネの数は20万~35万個とか。



クロウメモドキ（位置D）

クロウメモドキ科の低木で、赤い実のウメモドキとは別の科です。湿地ややや湿った林内に生えます。実は毒です！



今日はここを観てみよう！

■どんぐりの落葉

自然共生園では少し変わったドングリが生えています。落葉をさがしてみね。

カシワ（位置B・C・Dほか）

柏餅に使う葉です。このあたりでは居久根や境界木に植えられています。鋸歯が丸いのが特徴です。



ナラガシワ（位置B・Hほか）

カシワのように大型の葉であるため、柏餅にも使う地域があります。柄が長いのが特徴です。ドングリも大型です。



ミズナラ（位置B・I）

奥山に多いドングリで里山では稀です。カシワより葉の縁がギザギザにとがり、ナラガシワより葉の柄が短いです。



花野の草原のはなし

■茅場（放牧区、サクラソウ園、展望野草園）

かつて、草が飼料や堆肥、屋根材として、暮らしにかかせなかった時代は、里には茅場が維持されました。盆明けから秋にかけて草刈が行われました。集落から遠い茅場には泊りがけで出かけ、「草泊り」という草刈小屋をつくって、そこで寝泊りをしながら茅を刈ったそうです。楽しい行事でもあったようです。刈った茅（ススキやオギ）は「しまたて」や「草小積」にして、乾燥させました。茅場は、木やササが生えないように、野焼きによって維持されることも多く、火に強いカシワだけが点々と残っているのも、茅場の風景の特徴です。人の手で維持された草原には、カヤネズミ等、稀少な草原の動植物の命が育まれています。



カシワが点在する草原風景



草泊り



しまたて



草小積



カヤネズミの巣